

## 第66回 男鹿駅伝競走大会イベントレポート (第1回:1区)



### 【スタート前】

今年も夏の到来を告げる男鹿駅伝当日の朝を迎えた。

男鹿半島は朝から濃霧に小雨と肌寒いくらいの気候である。ここ数年はスタート時に雨の中でのレースが続いているが、このレースの醍醐味は何と言っても、暑い中で起伏の激しく厳しいコースをタスキでつなぐことにあり、真に選手たちの力量が試される大会だ。

しかし、今日の気候は選手達には幸いで、まずはレース中に大きな波乱は無さそうである。

ここで少し男鹿駅伝の歴史に触れてみると、この大会は故高松宮殿下が男鹿半島の戸賀湾を望む高台を「八望台」と命名したことを記念し、昭和27年に一般4チームで競い合われたのが始まりで、その後、歴史を積み重ねて今年で66回目、男鹿国定公園に夏を告げる風物詩として年々盛大に開催されている。

そのレースを前に、監督の前田は気象条件に安堵しながらも、いつになく朝から緊張していた。

「何としても勝たなければ・・・」連覇のかかる状況もある、自らが監督に就任して初めて選手を伴走する駅伝でもある、様々に勝たなければならない理由や想いがあるが、何より前田を緊張させていたのは・・・傍に立つ鈴木社長の存在であった。今回、社長は多忙のスケジュールを押して現地まで駆けつけてくれたのだ。そして、社長だけでなく、そこには堀口工場長、ASD松尾社長、真坂工場長の姿もあった。こんな前代未聞の応援体制に、監督とは言えレース以前に動揺を隠し切れないのは当然だろう。そう、そこには絶対に負けられない緊張感があった。

前田は、自らを奮い立たせるように頷くと、レース前の静けさの中、ここまで準備してきた選手たちを信じ、各区間に向かう選手一人ひとりに声を掛けレースへ送り出したのだった。

一方、選手達は・・・監督の緊張を尻目に落ち着き払って「頑張ります！」と笑顔で応え、楽しそうに中継所へ向かっていった。

## 【第1区】

今年の一一般の部には39チームが出場、男鹿市長の号砲で男鹿温泉郷より、いよいよレースが始まった。スタート時には雨も止み、気象条件としては更に走り易い気候となっていた。

ここで第1区の特徴であるが、アップダウンの連続とカーブの多さ、集団走となるため唯一伴走車が付けられない区間で、その代わりに他の区間にはない給水所が2ヵ所設けられている。



1区：9.6km（男鹿温泉郷～男鹿中出張所）



スタートを切る1区 小原（中央後方）

今年1区を任された小原は秋田県出身の入社4年目。経理部管理課に在籍し、新エネ本部の損益管理を担当している。入社から故障に苦しみ、自ら納得できる結果を残せていなかったが、今年は春先から故障なくクロスカントリーを中心とした走り込みを続けた結果、連戦にも耐えられる脚筋力が戻ってきた。前田は今1番調子の良い小原を自信を持って1区に起用した。

レースは戦前の予想通り、外人選手が飛び出し、それを大学勢と小原を含む一般の数チームが追う展開に。

小原は集団の中で余力を残しながら走るが、最初の給水ポイントではうまく対応できず、水を身体にかけただけで、口にはすることはできなかった。給水所とは言ってもテーブル一つにプラスチックの水を並べただけのシンプルなもので、集団走では位置取りによって給水が難しくなる。



2位集団で力走る小原

レース中盤、小原は徐々に集団から遅れ始めるが、駅伝の流れを左右する1区を走る使命感と駅伝を走れる喜びを胸に歯を食いしばって必死に耐える。



キツイけどガマンだ!! 頑張れ 小原!!

2区には高校以来の駅伝を走る新人の渡辺が控えている。久しぶりの駅伝を最高の形で走らせてあげたい・・・小原はレースが終盤に移っても最後の力を振り絞り必死に中継所を目指した。

2度目の給水は残り1km少し手前にあるが、ここではしっかりと給水を口にし、一気にラスト1kmの坂を駆け下りスパート、ここまでの疲れも見せず、2区の渡辺に笑顔でタスキを渡して役割を終えた。その顔には力を出し切った充実感が漂っていた。

#### 【1区成績】一般の部

距離 : 9.6km

順位 : 4/39位 (大学を含む全体順位 : 10/53位)

タイム : 29分41秒 (目標タイム : 29分30秒)

以 上

※ イベントレポート (第2回 : 2区) へ続く